

高橋克彦

takahashi katsuhiko

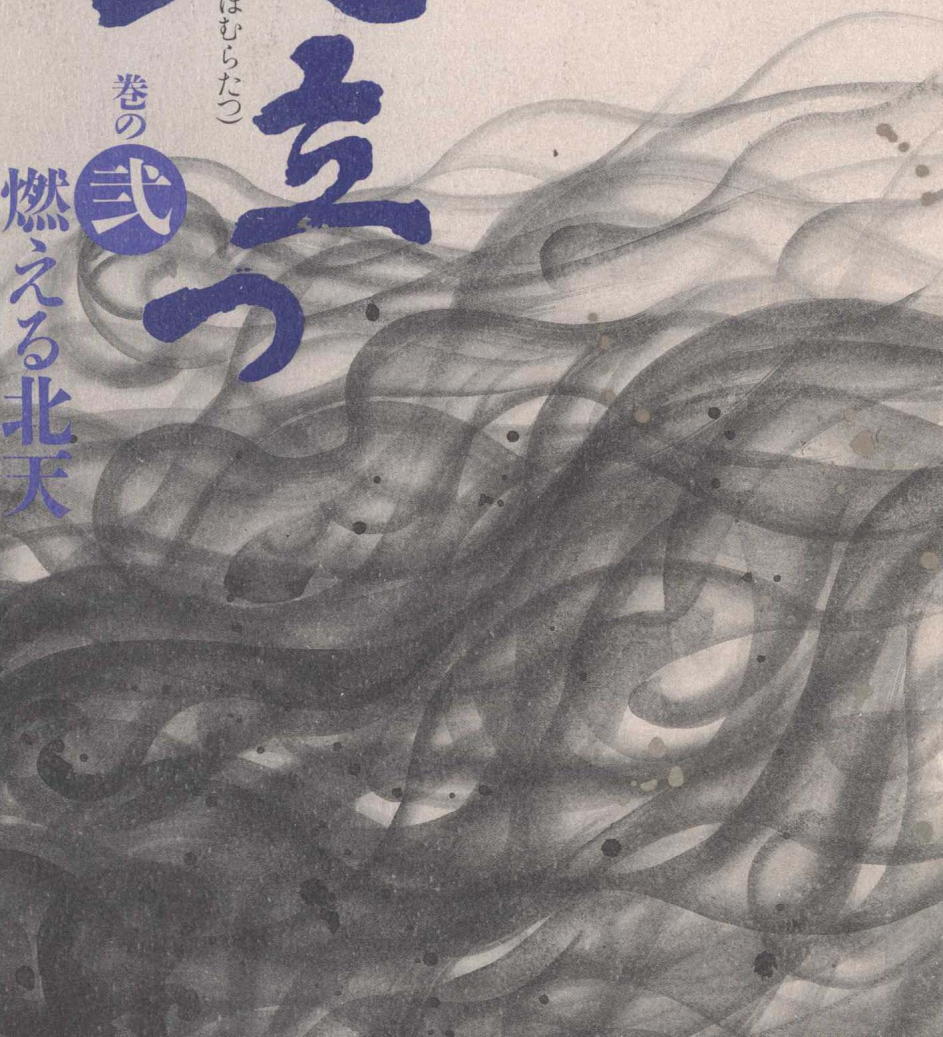
炎立ち

(ほむらたつ)

巻の

弐

燃える北天



炎立つ

高橋克彦

takahashi katsuhiko

巻の

弐

燃える北天

炎立つ 卷の弐 燃える北天

1993年 2月10日 第1刷発行

[検印廃止]

著者 高橋克彦

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41—1 郵便番号150

電話番号03—3464—7311

振替 東京1—49701

印刷 大日本印刷株式会社 製本 株式会社石津製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©1993 Katsuhiko Takahashi

Printed in Japan

ISBN4-14-005175-2 C0093

炎立つ 卷の式 燃える北天

装画 中島千波

題字 山田恵諦

装幀 蟹江征治

協力 NHKエンタープライズ

目次

天変 5

陽炎 71

切り火 171

燃える北天 251

激動 347

天 変

1

鬼切部おにきりべの合戦が春の幕開きとなった永承六（一〇五一）年は、陸奥むちのくに暮らすだれもの予測を裏切つて穏やかな日々が続いた。むろん敗北が伝わつた内裏には屈辱くつじやくと蝦夷えみしへの恐怖が渦巻いていたに違いない。だが、都と陸奥は遠く離れている。届いたとしても、微かな波紋かすでしかなかった。夏が来ても朝廷の目立つた動きは感じられない。どころか、まるで陸奥は忘れられてしまつたかのようにさえ思われた。不気味な沈黙である。新たな陸奥守むつのかみの着任を機会に和議を結ぼうとしていた安倍頼良あべのよりよしのアテは外れた。無為な日々が重なつて行つたばに、焦りと恐れは衣川えがわにも生まれはじめていた。

この時期、多少なりとも内裏の情勢を把握していたのは、藤原登任の代理として多賀城の守りに就いている藤原経清つねきよただ一人と言つてもよかつた。内裏は確かに揺れ動いていた。月に一度送られて来る書状にもそれは明らかだつた。後任の陸奥守が決まらない。間違つた判断を下せば取り返しがつかないのだ。否応なしに永い戦きとなる。今では内裏も登任の挑発が原因であつたと

承知している。登任と平たいらのしげなり繁成の二人が出家したことも明瞭だった。あくまでも自発的な出家と伝えられているが、鬼切部の敗退の責任を取らされたことはだれの目にもはっきりしている。ただ、自らの出家と伝えなければならぬ点に内裏の苦悩が見える。二人の進退を内裏の命と公表するのは罪もすなわち朝廷の側にあると認めることと同一である。無条件で俘囚ふしゅうを許すことにも繋つながりかねない。それは朝廷の威信に関わって来る。ことは陸奥ばかりに限らない。火種は全国に散らばっている。一つを許せば次も許さなければならぬ。簡単に制圧できるのなら問題もなかった。たとえ非が朝廷にあるうとも、力をもつて不満を封じればよい。だが、それもむずかしい。敗北を喫したのは朝廷軍の方なのだ。正義は俘囚ふしゅうにあつて、勝利も俘囚ふしゅうにある。下手に刺激すれば朝廷の屋台骨を崩す結果となる。身近で情勢を熟知している出羽守でわのかみからも、戦さは控えるべきだとの進言が届いていた。速断は無謀であつた。

幸い鬼切部の戦い以来、安倍軍に不穩な動きは認められない。それを頼りに内裏はずるずると決断を延ばし続けていたのである。

そのまま代理の経清を陸奥守に任命したらどうかという案も出たと耳にしている。しかし、何人かの参議の反対によつて流れたらしい。経清の祖父は陸奥守を務めた男だ。その血筋から言う問題は無いのだが、祖父は朝廷に叛旗はんきを掲げて挙兵した平たいらのたかつね忠常を支援した人間なのである。いかに安倍頼良と対等にできると分かつていても許すべきことではない。位を与えることと、実際の任官は異なる。経清とて望んでもいかなかったので、その噂を耳にしても氣にならなかった。む

しろ、自分を陸奥守に任命しようという意見があったという方が驚きだった。若輩の自分を頼りにせねばならぬほど内裏は当惑しているのか、と不安の方が先立つたくらいだ。

これから先、陸奥がどうなるのか、経清にもまったく想像ができない。

当分は撤退するつもりかも知れない、とすら経清は感じていた。この秋に陸奥守が決定したところで着任は来年の春以降となろう。つまりは一年も陸奥守が多賀城に不在となる。古い昔はともかく、経清の知っている限り、そういう不祥事ははじめてである。軍備を整えているという噂もない。奥六郡おくろくぐんの支配を当分は放棄すると連絡があったとしても、今の状況では少しもおかしくなかった。俘囚おびの力に怯えてはいるものの、内裏も安倍頼良が都まで攻めて来るのは不可能と見ている。

ことを急がずに態勢を整えるのが大事と主張する参議の数が増えていることも経清は知っていた。

〈陸奥守がどなたに決まるかだな〉

すべてはそれにかかっている。

経清は居室にごろりと寝転んだ。

蟬時雨せみときりが耳に心地好い。

陸奥守の居ない多賀城は退屈を持て余していた。兵士たちも昼寝をしている時間だ。

「若、おられまするか」

遠くから忠平ちゅうへいの声が響いた。

「ここだ」

経清はのんびりと胡座あぐらをかいて待った。

「珍客にござります」

忠平は笑みを零こぼしながらやって来た。

「いかに若でも当てられますまい」

「女か？」

「どうしてそれが？」

「その顔を見れば分かる。杉江でも参ったか」

「その程度ではまだまだ」

忠平はまた笑いを取り戻した。

「俺への客か？」

「むろんのこと」

「では知らぬ。訪ねて来るほどの女などおらぬ。追い返せ」

「若の悪い癖にござりますぞ。少しは考えてごらんなされませ。必ず覚えておられるはず」

「忠平の言い方が気に入らぬだけだ。この暑さと言うに、元気な男よな」

「仕方がありませぬな。都の真耶まやどので」

「真耶？ あの者がなぜここに」

経清は目を円くした。都の市姫ノ社の側で店を開いている女だ。

「それはご自身でお訊ねなされませ。ここへ通しまするか？ 今は西門の詰め所に」

「一人か？」

「さようで。だれから聞いたものやら、手前を訪ねて参りました。ぜひとも若にお目通りいたしたいと。相変わらず美しい」

「俺が行こう。多賀城の中に入れるわけにはいかぬ。あの者は乙那どのと懇意だ。あるいは安倍に頼まれて探りに来たのかも」

経清の言葉に忠平は啞然となった。

「いかにも、迂闊でありました」

「もつとも、多賀城なれば永衡どの方が俺よりも詳しい。それはあるまいが」

「若もお人が悪い。冷や汗を掻きました」

忠平は苦笑いした。

「少し待たせておけ。水で汗を流して参る」

忠平は頷くと小走りに外へ出た。

「ただの旅ではあるまい」

経清は嫌な予感に襲われて息を吐いた。

真耶は西門の前で忠平と並んで待っていた。物見高い兵士たちが真耶の来訪を聞きつけて用もないのに門を出入りしている。真耶は宋人である。都と違って多賀城周辺では珍しい。切れ長の黒い瞳で真耶は挨拶した。

「城の外で聞こう」

経清が言う。真耶は喜んで従った。当然のように忠平が続く。

「兵士たちには目の毒でしたね」

得意そうに忠平は笑った。

「乙那さまの使いで参りました」

城から離れると真耶は打ち明けた。

「だろうな。どんな用件です」

「乙那さまが冠川^{かんがわ}近くの志波姫神社^{しはひめ}で待つております。よろしければそこで夜までお待ちすると。そのご返事をいただきます」

「乙那どのがこの近くにおられるのか」

「多賀城をお訪ねしてはご迷惑であろうと申しておりました。それで私が」

経清は納得した。乙那の顔が兵士たちに知られているとは思えないが、安倍に近い人間である。万が一発覚すれば危ない。また経清にしても、そういう人間と多賀城で会見たとなれば内通と

取られる恐れがあつた。

「わざわざ来られたからには、よほどのことであろうな。行くと伝えてくれ」

真耶は顔を輝かせた。

「いつから衣川に？」

「私でございますか？」

「都の方はいかがでした？」

「もはや都には戻ることがないと存じます」

「乙那どのの命令次第か？」

その言葉に真耶は詰まつた。

「やはりな。乙那どのの手下であつたか」

「手下と申しますと？」

忠平はきよんとした。

「都の情勢を探っていたのだ。酒を吞ませる店にはさまざまな者たちが集まる。ましてや都一賑わう場所なら都合がよい。その上、働いている女たちは傀儡女を生業としてゐる。どこにでも怪しまれずに出入りができよう。乙那どのと出会ったときからそう睨んでいた」

「では安倍の手の者で！」

忠平は絶句して真耶を睨んだ。

「乙那どのは戦さを阻むために働いていたのだ。我らの敵ではない。安心いたせ」

経清は忠平を制した。

「参議の方々に貢ぎ物みつものをして安倍に他意なきことを訴えているらしい者があるという噂も薄々耳にしておる。乙那どのであろう？」

「おそれいました」

真耶はすべてを認めた。

「多くはそれに傾いているそうだが……」

経清は真耶が顔を曇らせたのをみて口を噤つぐんだ。なにか変化があつたようだ。

「乙那さまにお聞きくださいませ」

真耶は経清の不審を遮さへきった。

「忠平、城に引き返して馬を」

経清は命じた。

「一刻も早く聞かねば落ち着かぬ」

「城の者たちにはなんと？」

「言い訳は忠平の方が得意であろう」

三人は夏の風を切つて馬を飛ばした。志波姫神社は多賀城からだいぶ遠い。伊治いじへ通じる道の

途中だ。だが、二つの城に挟まれた地点なので逆に警備の兵も居ない。確かに会見には安全な地点でもあった。

へなにがあつた？　　

馬を急がせながら経清は案じ続けた。

前方に神社の鬱蒼とした森が見えた。

経清と見届けてか乙那が姿を現わした。たった一人だった。経清の目は鳥居の奥を探していた。他にだれも居ない。この瞬間まで考えもしなかったが、罠の可能性もあつたのである。経清は少し寒気を覚えた。呼び出して殺すつもりであれば簡単にできただろう。いかに腕に覚えがあつても二、三十人に囲まれば勝ち目がない。殺されずとも人質にされれば面倒になる。内裏はますます俘囚の力を恐れるに違いない。

経清は神社の少し手前で馬を止めた。

乙那が笑顔で歩いて来る。

罠とは思えない。経清も馬を進めた。

「お一人で多賀城の近くまで参られるとは無謀にござろう」

経清は馬から降りて苦笑いした。

「なに、いざとなれば参議の藤原能長の信任状を所持している。その用事で伊治城に向かう途中だと申せば、疑う者など一人も」

「左中将の能長さまの書状を？」

「だいぶ黄金きんを無駄にした。都の公卿くぎょうほどアテにならぬ者はおらぬな。あの者どもが国を滅ぼす。つくづくと痛感させられた」

「なにがありました？」

経清はただならぬものを感じた。

「真耶、見張っていてくれ。俺は経清どのと内密の話をせねばならぬ」

乙那は経清を境内へと誘った。経清も忠平を鳥居の前に残して乙那に従った。

「新しき陸奥守については？ その様子ではまだ使いが参っておらぬと見えるが」

乙那は切り株に腰を下ろすと言った。

「陸奥守が決まったと申されるか！」

「それで慌てて都を出て来た」

「どなたが参られる？」

「みなものよりよし
源 頼義」

聞かされて経清は耳を疑った。

「源頼義と言ったのだ」

「しかし……まさか」

経清は青ざめた。と言うことは……